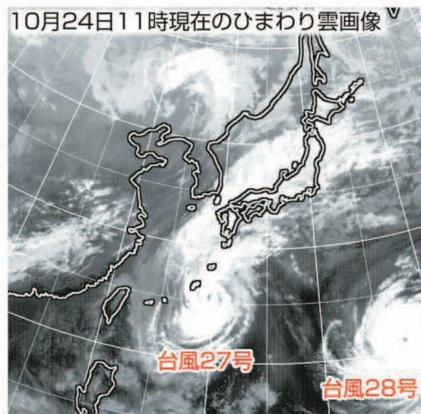
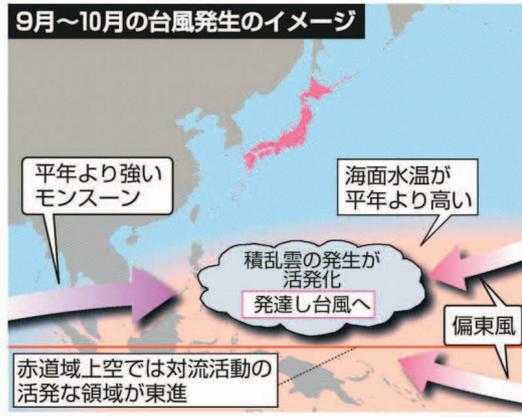


年	組	名前
---	---	----

秋台風 当たり年

モンスーン、偏東風の衝突 東寄りに 猛暑で海面水温高く 積乱雲活発化



大分地方気象台によると、9～10月の発生数14個（本土へ接近したの接近数8個（同2・4個）、本土へたのは5個で過去最多となる）は、平年（同2・4個）を大きく上回っている。特に10月に入ってから、生は珍しいことではないが、数が多いのがこの特徴としていた。

秋台風が相次いだ要因として、発生を促す複数の条件が重なったことが考えられるという。熱帯赤道域の上空で対流活動の盛んな領域が東に進んでいく「赤道季節内変動」が9月後半に太平洋西部に到達、それと同時にインド洋北部から

9～10月で14個発生

佐伯市など県南部に大雨をもたらした台風27号など、ことしに入ってから台風発生数は29個と、年間の平均発生数25・6個をすでに上回っている。8月は平年並みだったが、9～10月に多くなり、秋台風の“当たり年”となっている。

吹くモンスーンが強まった。そのため偏東風とぶつかる地点が東寄りになり、今夏の猛暑の影響で海面水温が高くなっているフィリピンから太平洋中部の海域で、積乱雲の発生が活発化したとみられる。

これまで最も遅く日本に上陸したのは1990年の台風28号で、11月29～30日にかけて和歌山県白浜町南に上陸した。しばらくはフィリピン付近の対流活動が活発な状態が続くとみられ、今後、さらに発生数が増えることも考えられる。

気象台は「通常の11月の進路では日本に近づく可能性は低いが、気圧配置によっては接近する」ともあり得る」としている。

(2013年11月1日朝刊23面)

今年に入ってからからの台風発生数は29個と、年間の平均発生数25・6個をすでに上回っています。8月は平年並みでしたが、9～10月に多くなり、秋台風の“当たり年”となっています。

①今年の9～10月の発生数、本土への接近数はいくつで、平年の何倍ぐらいでしょう。

.....

.....

.....

.....

②秋台風が相次いだ要因は複数の条件があると考えられますが、説明してみよう。

.....

.....

.....

.....

③そもそも台風というのはどういふもので、こういった特徴があるか調べてみよう。

.....

.....

.....

.....